

# 「スクールソーシャルワーカーの活用を目指して」

## ～特別支援学校における実践～

○発表者名	鳥取県教育委員会スクールソーシャルワーカー	南崎加奈子（社会福祉士）
共同研究者名	鳥取県立米子養護学校校長	本間隆之
	鳥取県立米子養護学校 養護教諭	佐藤まりあ

### 1. 問題提起

S S Wの業務において学校現場では「つなぐ」という言葉だけが先行し、社会資源の紹介や利用につなげるという限定的な役割として捉えられている現状がある。S S Wの活用が推進されるためには、S S Wの業務の本質を理解してもらう必要があると考えた。

### 2. 目的

本研究では、拠点校におけるソーシャルワーク実践を通して、学校や地域のシステムに好循環が生まれる過程を明らかにする。そこからS S Wの業務の本質に迫り、今後のS S Wの課題と展望について考察する。

### 3. 方法

①可視化されない学校の課題整理、②学校アセスメント＝学校理解、③学校のニーズと課題の整理、④S S Wの働きかけ

### 4. 成果・課題

#### ○チーム学校の始動～令和元年から令和4年～

S S Wが校内ケース会議に参加することで同僚性が高まり、チーム学校としての支援が可能になった。S S Wへの相談件数や校内外のケース会議数が増加した。

#### ○未然防止体制の構築

校務分掌の協力を得ながら入学前スクリーニングを行い、入学後にはS Cによる高等部新入生の全員面談を行う体制となった。当日中にS Cのコンサルテーションを行っている。

#### ○学校の変化によるケースの好転

校内ケース会議の早期開催が可能となり、早期の支援開始と支援の質の向上によって問題が解決したり支援中であるが好転したりする効果が現れている。

#### ○機関連携の進展

学校ができる限りの支援を検討し、関係機関につなぐ根拠を整理することで関係機関との役割分担が明確になり、結果として子どもの利益へとつながるという好循環が生まれた。さらに、要保護児童対策地域協議会の枠組みを活用した定例会が実現した。

#### ○生徒指導提要改定を転機としたチーム学校の醸成

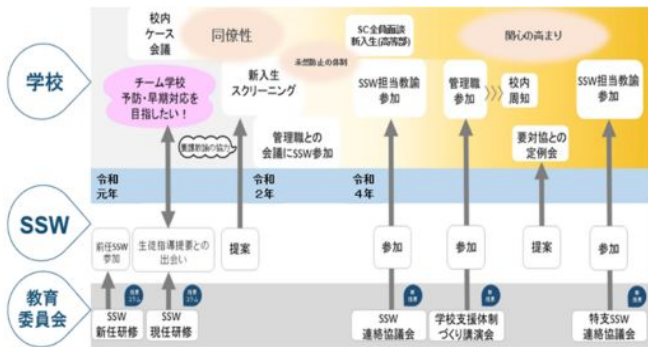
「チーム学校」「未然防止の重要性」「適切な指導・支援の充実のための児童生徒理解（アセスメント）の必要性」が明記されたことがS S Wの実践の追い風となり、チーム学校の醸成をさらに促進した。

#### ○いじめ対応記録様式の整備～令和5年～

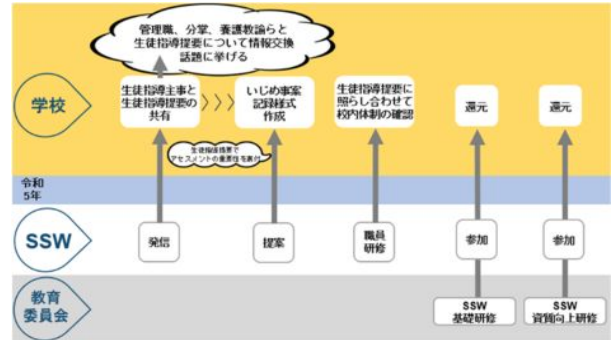
支援、指導の根拠が明確になるように被害者、加害者それぞれのアセスメント欄を設けたいじめ対応の記録様式を生徒指導主事とともに作成し、運用した。

#### ○S S W校内研修を通じた教職員のエンパワメント

根拠に基づいた校内体制づくりの成果を教職員が実感し、S S Wが校内体制を整える役割を教職員とともに担えると証明できた。それがS S Wの活用を望む教職員のエンパワメントにつながり、S S W自身もメゾ・マクロソーシャルワークの実践を意識できた。



(図1) 学校の変化 (令和元年～令和4年) 2023 南崎作成



(図2) 学校の変化 (令和5年) 2023 南崎作成

【課題・考察】

○SSWに期待される役割

- ・教職員の強みに着目して学校の変化を促す
- ・SSWとの協働によって教職員が主体的に学校を変革する力を発揮することを支える
- ・児童生徒・家庭・学校・地域の各システム間の連鎖的な変化を計画的に促進することで、クライアント自身がニーズを充足していくことを支える

○SSWの更なる活用のためにSSWに求められること

- ・SSWがミクロだけでなくメゾ・マクロレベルの機能に働きかけるための知識や技術を獲得し、スクールソーシャルワークの質を担保すること
- ・実践を言語化し、アカウンタビリティを果たすこと
- ・発展し続けるソーシャルワーク理論を継続的に学ぶこと
- ・日々変化する社会の風を読む力を備えること

○SSWとして期待する今後の展開

SSW同士がジェネラリスト・ソーシャルワークをベースに協働し、関係機関のソーシャルワーカーとも影響を与え合い、学校から西部地域、鳥取県全域へと好循環が広がることで地域全体が活性化し、誰もがウェルビーイングを実現できる社会に変化することを展望する。

